

もり
おと
大森勝夫の音
信たより

議員視察研修を終えて

みなさんこんにちは 大森勝夫です

新潟へ議員視察研修で行ってきました

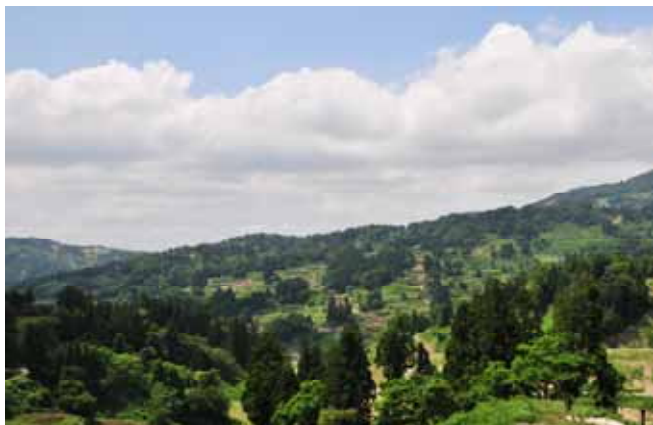
光ケーブル通信を利用した企業の現場視察と

中越地震で壊滅的被害を受けた旧山古志村です

私は震災時にボランティア隊として新潟へ行きました

四年弱の歳月でどう復興しているのでしょうか

現地で見te感じたことをお話しいたします



旧山古志村の庁舎からのながめ 美しい山村風景がひろがっています

旧山古志村の復興

関越道を小千谷インターチェンジへむけて、議員視察団のバスが走る。車窓からのながめに、ひとり感慨にふける。

四年まえの十一月、特別に発給された通行パスを所持し、一般車通行止めの関越道を走ったときの記憶と、今の風景を重ね合わせていた。当時、県の建築士会青年部長だった私は、震災住宅の判定士として新潟へ向かったのである。災害ボランティア隊であった。

突然届いた指令は「十二時間後の深夜二時に水戸に集合。宿泊場所はあると思うが、震災状況がよくつかめない。寝袋を持参すること。」スバイ映画ではなく現実であった。そんなところへ本当に行くのと心配してくれた妻に「山岳部だったから野宿は平気、もし余震で孤立しても生き延びる自信はある」と言った言葉が、かえって不安にさせてしまった。長岡市へ到着し、集会所を宿泊地に指示されるまでは、正直、野宿を覚悟していた…。

現在は長岡市となった旧山古志村庁舎の三階に案内され、震災から復興までの映画を見せていただいた。壊滅的な村から一時離村しながらも、村を捨てずに「帰ろっ、山古志へ」の掛け声のもと、復興への道を歩んだドキュ

：震災で川がせき止められ埋没した住宅



メンタリー映画に目頭が熱くなった。



：案内していただいた斎藤課長

山古志村は棚田が作られるように、平坦な土地はほとんどない。いくつかの集落が点在する村だった。山崩れにより川がせき止められ埋没した地区や、再建が難しい地区は、新たに住宅団地を整備し集落ごと移住した。崩れた道路は、柔らかい地質のため補修は難しく、新たに別のルートで道路を敷設、トンネルや橋も架けられた。「正直、三年半でここまで復興できるとは思っていませんでした。あと何十年かかれば生活が出来るようになるのだらう」と当初は感じていました「震災に遭遇し耐え抜いた人の言葉は、一言ひとこと胸に響く。災害時は電気、水道、電話がすべて不能になります。連絡も取れず自分の足で情報を伝えるしかありません。トイレもだめです。生活水が不足するからです。援助隊は飲料水だけが「水」と思っています。生活水がないと困るのです。その要請も正しく伝わらず、水は十分足りているなどと判断されることもあります。また、山古志では死者は二名だけ

：民家を取り壊され、物置だけが残った地区



：写真 の集落ごと移転した新設住宅地

でした。近所同士で救出しあったからです。救助隊が来て、報道される頃では遅いのです。この村では、みんな顔見知りです。あそのこの年寄りはこの時間帯はいつもテレビを見ていた、家に残り残されているはずだから救出しようとして迅速な救助ができたのです。都会では近所付き合いを敬遠しがちですが、いざというときに助けてくれるのはお隣さんだけなのです。淡々と語る言葉に、多くの教訓がこめられている。経験をふまえた上での教訓だ。

「ほとんどの住民が帰ってきています。私はここで生まれ育って、ここを離れる気にはなりません。時間が違うんです。自分を中心にゆっくり流れている感じがします。生きていく実感があるのです。ほかではそうはいきません、時間の流れが違うと思うのです。」案内をさせていただいた斎藤さんの言葉にふるさとへの限りない愛情を感じた。その愛情を村民誰もが持つていたから、奇跡的な復興をなしとげたのではないだろうか。

議場が宅配企業の電話対応センターに転用



光通信利用企業の地方進出

旧塩沢町。現在は南魚沼市。豪雪地帯の越後湯沢の北に位置する。自治体の合併により空いた庁舎の議事堂が、宅配業者のコールセンターとして利用され、百人以上の雇用を生んでいるという。立地条件の優劣、特に距離のハンディが理論上なくなるのが、通信を利用して業務を行なう企業だ。大子町のような高速道路や新幹線から遠い地区での企業誘致には通信関連の企業に絞るのは有効であろう。そう思案し視察へ伺った感想をお伝えします。

豪雪地帯で、冬場は出稼ぎをしなければならぬ。冬でも働ける場所をと、昭和四十年代から企業誘致には力を入れてきたという。オペレーションセンターは、継続的に企業を誘致してきた「いま」のひとつの結果だといふ。昔は繊維縫製が盛んであったが、現在では撤退している。ここでの雇用者数が一番の

企業は「雪国まいたけ」で1,200人ほどの規模だといふ。誘致した企業が恒久的とはいえず、舞茸のように地場産業から大きな展開が望めることもあるという。一年の半分を雪に閉ざされる環境ゆえに、あらゆる可能性の職場確保に取り組んでいる姿勢が伺えた。

「たんに働ける場所があればいい、ではこれから通用しません。毎年、ここから東京の大学などへ若者が出て行きます。そうした若者が帰ってきて働ける職場、高学歴者を採用できる企業があれば、大学を出た若者がふるさとに戻ってこられます。そのような高いレベルの企業の誘致を狙っています。」担当者の言葉に嫉妬の気持ちさえ湧いた。この地域ですでに次の段階を狙っている。長期にわたり企業誘致をすすめ紆余曲折を経験してきた自信が、隠していてもジワリと伝わってくる。

「私達は大子町という環境で考えなくてはならない。新たな可能性があれば検討し、挑まなければならぬ場面も出てくると思う。ひとときの感情、その場限りの損得ではなく、長期的な展望をともなつた価値観と判断が絶対必要なのである。」

旧塩沢町では四十年以上の企業誘致の経験をふまえて、高いレベルで展開しているのだから。



右側建物三階がコールセンター